

「島よ」その1

尾崎 徹

1992年6月28日。福永陽一郎先生が亡くなられて2年あまり、まだその喪失感を拭えないままの70余名のOBは、にわかに結成されたOB合唱団として北とびあさくらホールの舞台に立った。

その前年1991年のアーリーOBステージにおいて久邇先生のピアノでモーツァルトのレクイエムを歌ったメンバーが中心となって、今年も何か歌いたいとの想いが募っていた。でも相応しい曲をアーリーのOBステージに、と私がオファーを受けたのはもう年が明けてからだったと思う。携帯電話もない時代、呼び掛けてを始めて、集まって一つのステージを作り上げるのは技術的にも時間的にもとても困難なことではあった。

急いで過去のプログラムを読み返し、限られた時間で完成させるにはどの曲がふさわしいか調べたところ、各年代において福永先生が最も多く振っているのが「島よ」であったということがわかった。その年のアーリーの総ての現役ステージのピアノを任せられ、さらに私が在校三年のとき、福永先生の指揮で「島よ」を弾いてくださった池谷玲子さんにピアノをお願いした。練習回数は僅か4回、集まったOBは池谷さんの鬼気迫るピアノに背中を押され、毎回の緊張感張りつめた練習を経て本番当日を迎えた。

福永先生の神格化されたバトンテクニックや、激しく煽る‘灼熱のなだれ’など、真似ることさえもできず、ただ、歌うメンバーにその音楽を託した。福永先生の「島よ」が身体に染み込んでいたメンバーではあったが、当然のことながら先生の「島よ」とは異なり、それぞれの現役当時の想いが昇華した演奏となったと思えた。

福永先生の音楽は私の背骨に生えたシッポのように、体から離れることのできない『音楽のセオリー』として私の中に居続けていた。その枠を超えるようなことは決して起きないのだが、その「島よ」は池谷さんを巻き込んでOB一人一人の気迫が、さまざまな芥を取り払い音楽の真髄に迫る不思議な音楽空間を作っていたことは間違いない。

アーリー当日、大久保先生は左目を真っ赤に腫らして本番をお聴きになっていた。実はその日の朝、植物に掛ける殺虫剤が誤って目に入ってしまったのだ。でも腫れた目をかばいながら本番までは聴いてお帰りになるおつもりだったらしい。ところが終演後どうしてもOBにひとこと言いたいと、打ち上げにも参加され、目の痛みに堪えながら「本当に素晴らしかったよ」と仰っていたことが忘れられない。

今、当時の録音を聴き返すと、間違いなく一つの完成された音楽がそこにある。福永先生の指導が凝縮され、いい意味で角の取れた、しかし腰のすわった音楽となっている。

あれから四半世紀以上が過ぎた今年、私たちはそれぞれの人生経験を踏まえてさらに昇華されたステージを迎えられるのではないかと、そんなほのかな期待を今、いだいている。

2018.5.6